深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　それぞれの詩の押韻を確認してみよう。

【答】それぞれの詩の「構成」を参照。

▼ポイント▲「秋風引」のみ起句で韻を踏んでいない。五言の近体詩では第一句は韻を踏まず、近体詩は平声で韻を踏むのが正格とされることからすれば、むしろ「秋風引」の形式が通例だが、この段階では、韻を踏むことの理解が得られればよい。

言葉と表現の解答例

1　次の漢字がどのように使い分けられているか、漢和辞典で調べてみよう。

(1)　**覚・憶**　(2)　**聞・聴**

【答】「覚」は瞬間的、「憶」は持続的に心に感じるという違い、「聞」は聞こえてくる、「聴」は耳を傾けるという違い。また、「聞」は隔たりを通して耳にする、「聴」はまともに耳を向けてきくのようにとらえることもできる。

▼ポイント▲　訓読みでは同じになってしまう漢字であっても、意味の違いがあるものは多く、詩を読む時にはその違いに注意する必要がある。

言語活動の解答例

1　季節と心情の関係について、それぞれの詩を比較し、話し合ってみよう。

【答】「花」「雨」「風」「雪」などが季節の象徴的な景物となっていることを確認し、作者の心情がそれと結び合わされて詩の表現が成り立っていることを理解する。

▼ポイント▲「学習活動のポイント」の「まとめ」にあるように、詩がどのような意味のまとまりによって構成されているかに気づかせつつ、そこから自然景物の描写を選ぶところが最初のポイントになる。そのためには、詩の構成とともに、句の構成（意味の切れ目）について確認させる時間を設けるのも効果的であろう。意味のまとまりは、句のリズムの単位（五言であれば、二・三、七言であれば、四・三もしくは二・二・三）と一致することが多いが、例外もある。ここで扱った詩の中では、「南朝四百八十寺」のみが例外であることに注意すればよい。

　具体的な手順としては、それぞれの詩について、担当するグループを決め、その詩の中で象徴的な景物の表現を意味のまとまりごとに抜き出す作業を行なう。そのさい、抜き出す表現は複数あってよいが、より中心的なイメージを詩のなかで担う景物には◎、

そうでないものには○印をつけるなどの工夫をする。さらに、その表現によって呼び起こされる感覚や感情について話し合い、詩の結びに置かれる心情と、それとは異なりつつ、詩の世界を複層的にしている心情にも注意する。たとえば「春暁」の後半だけ読めば、風雨によって花が落ちることが春を惜しむ心情と結びついていることは明らかではあるが（「花落」）、一方で、前半の春の朝寝の耳に聞こえた鳥の声には、自然を楽しむ心が託されている（「聞啼鳥」）。春を楽しみ、かつ惜しむのである。「江南春」における「鶯啼」と「煙雨」も春らしさの表現において、同様に複層的な関係にある。

担当グループそれぞれの発表が進んだところで、それぞれの詩における心情の違い、また、景物と心情の関係の違いなどを議論することも、詩の理解を深めるであろう。例えば「秋風引」と「江雪」では、ともに「孤」という心情が「秋風」や「寒江雪」によって強調されていると言えるが、その「孤」のありかたは、それぞれ異なっているように見え、それは「風」と「雪」の違い（あるいは「孤客」は「最先聞」、「蓑笠翁」は「独釣」のように、受動的か能動的かの違い）とも関連するのではないかといったような発見が生徒自身によってなされるよう促すのも一つの方法である。

（齋藤　希史）